世子六十以後申楽談儀　　秦元能聞書

遊楽の道は、一切物まね也といへ共、申楽とは神楽なれば、舞歌二曲を以て本風と申すべし。さて、申楽の舞とは、いづれを取り立てて申べきならば、此道の根本なるがゆへに、翁の舞を申べきか。又、謡の根本を申さば、翁の神楽歌を申べきか。「志を述ぶるを歌といふ」と、古くも言へり。是、万曲のみなもと成べし。しかれば、舞歌二曲をなさざらん者をば、うるわしき為手とは、いかが申べき。

　三道云、「上果の位は、舞歌幽玄本風として、三体相応たるべし。上代・末代に、「芸人の得手得手様様なりといへ共、至上長久の、天下に名を得る為手に於きては、幽玄の花風を離るべからず。軍体・砕動の芸人は、一旦名を得るといへ共、世上に堪へたる名文なし」と云云。

又、花伝云、「和州・江州・田楽に風体変れり。然共、真実の上手は、いづれの風なり共洩れたる所有まじ。只、人、一向の風斗を得て、十体にわたる所を知らで、余を嫌う。風体・行儀は面面各各なれ共、面白しと見る花は、和州・江州・田楽に洩れぬ所也」と。「殊に、此芸とは、衆人愛敬を以て、一座建立の寿福なれば、時に従い、所によりて、愚か成眼にもげにもと思ふやうにせんこと、寿福也」と云云。

先、本風より次第次第に移るべし。そうじて、鬼といふことをばつゐに習ぱず。二曲三体の功入て、戒臘を経て、其面影面影を今する也。名を得しよりこのかたとても、狂ゐ能をばせざりしと也。

一忠でんがく・清次法名観阿・犬王法名道阿・亀阿、是、当道の先祖といふべし。

彼一忠を、観阿は、「我が風体の師也」と申されける也。道阿又一忠が弟子也。一忠をば世子は見ず。京極の道与、海老名の南阿弥陀仏など物語せられしにて推量す。しやくめいたる為手也。田楽能のゆへ也。

田楽の風体、はたらきははたらき、音曲は音曲とする也。並び居て、かくかくと謡也。入り替りては、鼓をも「や、ていてい」と打て、蜻蛉返りなどにて、ちゃくちやくとして、さと入也。鹿苑院将軍家、「高法師松夜叉は下手なれ共田楽也」と仰せられける也。

　喜阿、音曲の先祖也。日吉の牛熊が音曲を似すると申ける也。音曲能斗せし也。しづや、入かはりたる風体をす。彼喜阿、五位の声風真中の位也。九位には寵深花風に上りたる者也。妙の位は、そうじてえ言はぬ重也。上花に上りたらば、妙は有べき歟。

　世子十二の年、南都法雲院にて装束賜りの能有と聞て、罷りて、いか成ことを聞かんずらんと思しに、喜阿、尉に成て、麻の付髪に直面にて、「昔は京洛の、花やか成し身なれ共」の一謡、様もなく、真直に、かくかくと謡ひし、よくよく案じ解けば、後は猶面白かりし也。

炭焼の能に、麻の付髪、頂に折り返して結いて、今増阿着る尉の面を、一色に彩色き、練貫に水衣、玉欅あげ、薪負ひ、杖突ゐて、橋中にて咳一し、「あれなる山人は荷が軽きか、家路に急ぐか、嵐の寒さに疾く行くか、同じ山に住まば同じ挿頭の木をきれとこそ言ふに、疾く行くか。重なる山の木末より」と一声に移りし、くせ物也。胡銅の物を見るやうなりし也。

其南都の装束賜りの比より、声損じ初むると申也。一謡と謡い届くること無かし也。声かなはずして、しづやに言はせて、そとそと付けし也。「吹く風の荒磯に」としづやに謡はせて、「に」から付けし也。天性奇特の所は、昔の名人の中にも秀でける者也。

今の増阿は、能も音曲も閑花風に入べき歟。能が持ちたる音曲、音曲が持ちたる能也。南都東北院にて、立合に、東の方より西に立廻りて、扇の先斗にて、そとあひしらいて止めしを、感涙も流るる斗に覚ゆる。かやうの所、見る者なければ、「道も物憂く」と語られし也。然共、上果の所は諸人の目にも耳にも及ぶやらん、「増阿が立合は、余のにも変りたる」など申者有。尺八の能に、尺八一手吹き鳴らひて、かくかくと謡ひ、様もなくさと入、冷えに冷えたり。

彼増阿は、打向きたる田楽にてはなし。何をもする也。並び居て謡う体、炭焼に薪負ひたる様は、田楽也。

犬王は、上三花にて、つゐに中上にだに落ちず。中・下を知らざりし者也。音曲は中上斗歟。葵の上の能に、車に乗り、柳裹の衣踏み含み、車副の女に岩松、車の轅にすがり、橋がかりにて、「三の車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、夕顔の宿の破れ車、遣る方な」と一声て遣りかけて、たぶたぶと言ひ流し、「憂世は牛の小車の、憂世は牛の小車の、廻るや」などやうの次第、「をぐるまの」、「まの」を張りにていふて、言ひ納めに、とたと拍子踏みし也。後の霊などにも、山伏に祈られて、山伏はとよ、それをばかへりみづかひ、小袖扱い、えも言はぬ風体也。

天女などをも、さらりささと、飛鳥の風にしたがふがごとくに舞ひし也。金泥の経を脇の為手にやりて、引手より舞ひ出だしし也。初めの段には、左へ扇取ることも、いたくはなかりし也。入はに「何の何して」とかかる時、左に取り、大輪に押して廻りなどせし也。何と舞しやらんと覚えける也。かやうなれども、已上して道は有を、皆、面白しと見て、帯を解ける斗を似せて、結び納むることを知らず。

　念仏の申楽に、練貫を一かさね同じ前に着て、墨染の絹の衣に、長長たる帽子を深深と引入て着し、面白かりし也。幕屋より申て来たるやうに、人中より、常住に、一心不乱に、「南無阿弥陀仏」と申て、鉦鼓を叩きて出でて、りやうりやうと、二三べん、拍子にもかからず打出して、左右の手を合はせ、古体に拝みし也。言葉の端に、「南無阿弥陀仏」と、一心不乱に、誠に常のやうに申て、あなたへゆらり、こなたへゆらりと、立歩きてし面影、今も見るやう也、と云云。

　もりかたの申楽に、物に腰掛け、経を読む所へ、妻・母来りて、二人「いかに」と申時、母の方つくづくとしばし見て、顔引く尻目にて、妻の方をそと見てうつぶきし、面白き心根也と、其比沙汰有し也。こは子にてなきと云申楽に、「あれ、疾く去ね」と申とて、目にて心根をせし、同く沙汰有し也。

　近江のかかりは、立止まりて「あつ」と言はする所をば露程も心にかけず、たぶたぶと、かかりをのみ本にせし也。後の入はなどには、みなみな立て謡ひて、さと入也。道阿こそ、上果にて、かかるかかりをのづから面白きを、今の近江は、至らずして其体をする間、音曲も風体も延び腐りたる也。近江の風体、かくのごとし。

　脇は、とよ、直成為手なり。規模なることをば規模規模とせし也。ひたと添うたる脇は、岩松。時時、牛熊、脇柱をせし也。

先祖観阿。「静か舞の能、嵯峨の大念仏の女物狂の能など、ことに名を得し、幽玄無上の風体也」と、花伝にも有。上花に上りても山を崩し、中上に上りても山を崩し、又、下三位に下り、塵にも交はりしこと、ただ観阿一人のみ也。

　住吉の遷宮の能などに、悪尉に立烏帽子着、鹿杖にすがり、幕打上げ出でて、橋がかりにて物言はれし勢ひより、論義言ひかけ、又、「紀の有常が女とあらはすは尉がひがこと」など、締めつ含めつせられし、更に及がたし。

大男にていられしが、女能などには細細となり、自然居士などに、黒髪着、高座に直られし、十二三斗に見ゆ。「それ一代の教法」より、移り移り申されしを、鹿苑院、世子に御向かい有て、「児は小股を掬かうと思ふ共、ここはかなふまじき」など、御感のあまり御利口有し也。何にもなれ、音曲をし替へられしこと、神変也。

　又、怒れることには、融の大臣の能に、鬼に成て大臣を責むると云能に、ゆらりききとし、大になり、碎動風などには、ほろりと、ふり解きふり解きせられし也。

　草刈の能に、「この馬はただ今飢へ死に候べきや」より、譬へ引きし、「騅逝かず騅逝かず」など云下して、「ここは忍ぶの草枕」と謡ひ出し、目づかいし、さと入し体、此道に於きては、天降りたる者也共及びがたく見えし也。

其比の脇は、十二三郎、助九郎。十二六郎は、若くて、下にて付けし也。狂言は、大槌也。

　是みな、先祖の風体、大かた聞しまま書き置く所也。彼先祖の風体を合はせて、世子一建立の十体に引合はすれば、観阿一建立の上に、猶洩れたること有べからず。

　静成し夜、砧の能の節を聞しに、かやうの能の味はひは、末の世に知人有まじければ、書き置くも物くさき由、物語せられし也。しかれば、無上無味のみなる所は、味はふべきことならず。又、書き載せんとすれ共、更に其言葉なし。位上らば自然に悟るべき事とうけ給はれば、聞書にも及ばず。ただ、浮船・松風村雨などやうの能に相応たらんを、無上の物と知るべし、と云云。

　増阿、世子の能を批判して云、「有がたや和光守護の日の光、豊かに照す天が下」など、たぶやかに云流す所は、犬王。蟻通の初めより終りまで、喜阿。かひつくろひかいつくろひ、曲舞ばたらきは観阿也、と云云。

「ありとをし共思ふべきかはとは、あら面白の御歌や」など、「是六道の巷に定め置ゐて、六の色を見する也」などやう成所、「何となく宮寺なんどは、深夜の鐘の声、御燈の光などにこそ」、「燈火もなく、すずしめの声も聞えず」、かやうの所、皆喜阿がかり也。「神は宜禰が慣らはし」など、かくと言ひし也。「宮守ひとりも」のやう成「ひ」文字、つまりて「ひつ」と言ひし也。「松の木柱に竹の垣、夜寒さこそと思へ共」、みなかのかかり也。

鵜飼の初めの音曲は、殊に観阿の音曲を移す。唇にて軽軽と言ふこと、彼かかり也。此能、初めより終りまで、皆闌けたる音曲也。「面白の有様や」より、此一謡斗同音也。後の鬼も、観阿、融の大臣の能の後の鬼を移す也。

　彼鬼の向きは、昔の馬の四郎の鬼也。観阿もかれを学ぶと申されける也。さらりききと、大様大様と、ゆらめいたる体也。光太郎の鬼はつゐに見ず。古き人の物語の様、失せては出来、細かにはたらきける也。たうらうの能を書きて、観阿脇に成て、世子せられしに、失せて出で来たる風情をせしを、「光太郎が面影有」と語られける也。彼たうらう、世子の狂い能まねかたの初め也。

一、定れることを知べし。立合は、幾人もあれ、一手成べし。さてこそ立合にて有べけれ。さて、為手のひとり揉む所有。「都良香もろ共に」などいふ所は、為手のひとり揉む所也。三度揉む所あり。三度目などには、扇を広げて、右に持ちて、手を広げて、前へ「やや」と言ひて踏み寄りて、両の袖を打込みて、左右へさつさつと捨つる也。是、一の手也。昔有し也。曲舞の序にも、揉む所有。永めて云下す時、ゑひゑひと揉む也。

序をば序と舞、責めをば責めと、責めつ含めつすること、定れる也。「剣樹共に解すとかや、石割地獄の」と云所をば、きつと低く成て、小足に拾う所也。さやうに、責めては延べ責めては延べ、「火燥足裏を焼く」など云所にては、はや手も尽き、いかん共せられぬ所にては、後などへ理もなく踏んで退り、きりきりと廻り手などして、「飢へては鉄丸を呑み」などいふ所を待受けて、喜ふで、扇を左へ取て、打つ開きて、押して廻りなどする。かやうに、道を守り得て、すべき時節時節有を、ただ面白しと斗見て、いまだ手も尽きぬに、くるりと廻り廻りなどする、あさましき事也。

内にて舞を舞ふにも、あひ構へて序破急を智べし。序より謡い出だしたらば、序より舞ふべし。急より「舞へ」とあらば、急の手を舞べし。其時序の手を舞はば悪かるべし。乱酒の時、にはかに能などのあらん時の能、貴人の機嫌をうかがふべきこと、又かくのごとし。又、二人出ることに、児など舞いたる上に舞こと、二重成事、心得べし。無下に大人げなく見ゆ。初めの舞を序にして、破の末をちと心根に見せて、急をそと舞て入べし。

又、扇落しの手とて、増阿せしは、扇を落して、左右の狩衣の袖の露を取て、手に結て取し也。道阿も其時見物す。世子一流はかくはなし。定まるまじき也。口伝有べし。膝返り、くるりと廻ること、法の内にはすべし。法の外にはすべからず。丹後物狂の鞨鼓取に、地に有物なれば、膝を突きて取て返る。ここにては似合ふべし。

　一、万事かかり也。かかりもなきやうの風情も、又其かかりにて面白し。かかりだによければ、悪きことはさして見へず。美しければ、手の足らぬも苦しから〔ぬ〕也。悪くて手の細か成は、なかなか悪く見ゆる也。

舞に目そと歪む、面白所有。左へはさのみは歪むまじ。右へは目そと歪むべし。五七五七の句毎に、見はたらきをすべし。

松風村雨の能に、「わが跡弔ひて賜び給へ」の所より寄らば、風情延ぶべし。「わが跡弔ひて」迄はかかへて持ちて、「いとま申て」と云所より寄りて、「かへる」と云時帰れば、面白き也。「松風斗や残るらん」に、「残る」から帰るほどに、面白もなき也。「らん」から帰るべし。殊にかやうの所、心根・風情相応なくば、面白も有べからず。

姨捨の能に、「月に見ゆるもはづかしや」、此時、路中に金を拾ふ姿有。申楽は、遠見を本にして、ゆくやかに、たぶたぶと有べし。然を、「月に見ゆるもはづかしや」とて、向かへる人に扇をかざして、月をば少も目にかけで、かい屈みたる体に有ゆへに、見苦しき也。「月に見ゆるも」とて、扇を高く上げて、月を本にし、人をば少目にかけて、をぼをぼとし、し納めたらば、面白風成べし。

高野の能に、「いつかさて尋ぬる人を」など、軽軽早早と謡ふべし。ことにかやうの所、遅くてはかかり延ぶべし。

　丹後物狂、「思ふこと、思ふこと、なくてや見まし与謝の海の」、かやうの所、音曲が悠悠と有て、音曲にて風情をする所也。其を、早く言ふによりて、為手の風情もなし。いかにもかかりたる音曲成べし。

　右近の馬場の能、「待つこと有れや有明の」、かやうの所、次第次第に寄すべし。押し掛けたるまでは又なし。

　恋の重荷の能に、「思ひの煙の立わかれ」は、静かに、渡拍子のかかり成べし。此能は、色ある桜に柳の乱れたるやうにすべし。船橋などは、せめて、古まうたる松の風になびきたるやうにすべし。鬼は、まことの冥途の鬼を見る人なければ、ただ面白が肝要也。現在のこと、いと大事也。

一、よろづの物まねは心根成べし。先、其心根心根を思ひ分かちての上の、風情・かかり也。

　人の心も、気を詰めて見る時も有べし。ただ「あら面白や」と見る時も有べし。気を詰めて、「あは止むるよ止むるよ」と、満座思ふ気色あらば、そと止むべし。大かた、「面白し」と、悠悠と覚ゆる気色あらば、きと気を持ちて、きと止むべし。当座の人の気に違へて止むれば面白。これ、人の心を化かす也。されば、これをば殊に秘して、見ん人には知らすまじき也。

又、今ほど、化かすといふこと、「やうやう化けあらはれて」となど云。それは、こなたが目が利かぬ也。児の名残にて、ひ若時を見分けぬ也。化かすとは、上手の、悪きとは心得ながら、年などの寄りて、世子出家以後、内にての舞をそそと化かすこそ、化かすにてあれ。下手の化けのあらはるるといふこと、ただ目が利かぬ也。

　浮船の能、「此浮船ぞ寄るべ知られぬ」と云所、肝要也。そこをば、一日二日にもし果つるやうに、捻ぢ詰めて納むべし。

　常盛の能に、此女、思ひ入れてすべきを、皆浅くする也。人の謡ふまでうつぶき入て、其うちよりくどき出だすべし。そうじて、女の能がかり、うつこみて、時時そそと顔など見上げたるべし。

隅田河の能に、「内にて子もなくて殊更面白かるべし。此能はあらはれたる子にてはなし。亡者也。ことさら其本意を便りにてすべし」と世子申されけるに、元雅は、えすまじき由を申さる。かやうのことは、して見てよきにつくべし。せずば善悪定がたし。

　四位の少将の能、事多き能也。犬王は、「えすまじき也」と申ける也。「一向きに成共せば、大和の囃子にてすべき」と申けるとかや。「月は待つ覧、月をば待つらん、われをば」の所、一建立成就の所也。

　高野の能に、「文こそ君の形見なれ、あらおぼつかなの御ゆくゑやな。呼子鳥」と狂い出して、あまりに久狂いて、「誘はれし」と一声になす、悪し。「呼子鳥」と云心根を、いまだ見物衆に持たせて、其匂ひを少し風情に籠めて、「誘はれし」と一声に移るべし。

　丹後物狂に、「花の物いふは」のほろほの拍子、ちやうど踏む、拍子を色どりて踏む也。「花の物いふは」と言ひ続くる心根にて、続くるうちに、いづくよりも知らずちやうど踏むを、今ほど、若者、拍子を本に、言ひ切りて踏む也。をかしきこと也。四位の少将に、「涙の雨か」、ちやうど踏む、同じ事也。早くても悪く、遅くても悪し。佐野の船橋に、「宵宵に」、ちやうど踏む、同じ。いと大事の拍子也。

　「柳はみどり、花はくれなゐ」の拍子、本は、「花は」の時二踏むべし。「みどり」の「り」の時一踏み加うれば、面白きかかり也。是はわうく也。

　鬼の能、ことさら当流に変れり。拍子も、同じものを、よそにははらりと踏むを、ほろりと踏み、よそにはどうど踏むを、とうど踏む。砕動風鬼、是也。拍子につきて味わうべきこと有。

又、河原の勧進桟敷崩れの時、本座の一忠、新座の花夜叉、かれこれ四人づつ、八人にて恋の立合をせしに、「恨みは末も通らねば」と、上げて言ひ納むる声詰まりければ、一忠、咳をして、扇のかなめ取直し、汗を拭ひけるに、花夜叉、「末も通らねば」と、ぶときりに言ひ納めて、笑はれけり。「一忠、花夜叉に恥を与へけり」と、当座申き。又、榎並と世子、鹿苑院の御前にて立合せし時、翁に、「そよや」と言ひて、そと止めけるに、榎並いまだ舞ければ、笑ひける也。其時、「観世、榎並に恥を与へんとてかくのごとくする」と、当座申き。上手の意地かくのごとし。更に人を悪しめんがためにあらず。

　又、橋がかり抱へて持つて、「あは舞うよ舞ふよ」と衆人に見すべし。舞ふべからず。後に手も詰まりて悪し。増阿がするも、さして受けず。

能に、成就せぬ為手有。泣くといふことに、袖を目にあてて、やがて引く。あるいは、片目など拭う様也。

　反返りは、腰と膝とにて返る也。張りたる弓の反り深きを外すやう成べし。時の間にちらりと返るべし。返る時、後に露ほども身が有ては悪かるべし。高く返りて低く納むべし。

　舞止むる時の扇は、広げたる端にて袖の囗を受けて、じつと止むる也。

又、舞を見ぬ舞有。舞を見るとは、わが舞ふ時の指の先などを、目をやる也。首筋などをも、ねそますやうに持ちて、肩と首との間、遠くなすやうにして、手先を上ぐべし。手を早く開く時は、捻ぢつけて納む。手を捻ぢて遣る時は、納むる手を早く納むべし。身を常よりも早く動かさねば、捻ぢつけて止むべし。身を常よりも遅く、静静と動かさば、ちやと早く止むべし。ここの段は、幼くて聞し間、能も覚えず。

又、似せたる能とは、せうとする能也。人の能を似せうとする斗にてはなし。

　舞の長く見ゆるは、面白もなきゆへ也。「あはれ面白からんずるよ」と見る所に、面白もなくて通るゆへに、長き也。

　内の舞の時、上下引つくろふことは、会釈にて、つと立たんことの硬くすげなきを色どる体成を、是を似するほどに、あまりにて目につく也。

一、どつと云位、初入門にも入べからず。たとへば、京へ上る者、東寺を見て「あつ」と言ひたる程也。又、面白き位は上也。物をことごとくしたるは、為手也。為手の上に能するは、はや上手也。上手の上に面白所也。しかれば、面白位、似すべき事にあらず。名筆の草に書き捨たるもの、似せは成べからず。真より功を経て後、自在成所也。

　能にむくやぎと云は、用也。花だにあらば、むくやぎ迄も入まじき也。むくやぎなきと云は、まづは毛を吹きて疵を求たる也。

一、声の事。時時「や」といふ声の有を、人似せて云也。似すべきことならば、や声にては有まじき也。近比、八幡放生会の能に、「秋来ぬと、や」と云しを、殊皆、時の興にもてはやされし。時節によりて、覚えず「や」と云声也。

「やうやう」と云声を言ふ者有。乗せたる心より出づ。能下らんとて、かかる心得出来る也。近比、此声出来て、下りたる者共有。

一、音曲のこと。音曲とは能の性根也。されば、肝要又此道也。

音曲の上士と申さんは、五音・四声より、律呂相応たるべし。五音相通のことは、ただ習ひ知るべきことのみならずといへ共、先有べき分際は習学して、祝言をばいづれの調子・声を以て言ひ、悲しみをばいづれの声にて言ふと、道を分て知らずば有べからず。稽古の次第と云は、先、わが声の正体を分別しての上のこと也。さて正路にも届くべし。

　直成かかりは祝言也。是を地体として、幽玄のかかり、恋慕のかかり、哀傷・無常音など、其かかりかかり、有文・無文の心根尽きて、闌けたる位にも上るべし。一返に心をやりて余を嫌ふべがらざること、能の十体に渡ることを知るべきがごとし。ただ、音曲は、美しく、吟にかなへるが上果也。

　又、曲舞・小歌の差別有事を心得べし。申楽は小歌がかりのみにて、曲舞は格別也。然共、観阿、白鬚の曲舞を謡ひしより、いづれをも謡ふ也。然共、ただ上げ下げ斗にてうち成りたる、曲舞道の音曲にてはなし。かれを和らげたる也。されば、曲舞は曲舞と謡ひ、小歌にも品品の体有ことを分けて、又、近江・田楽にもちちと変れることを心得、能をも書き、節をも付くべし。至り至りて、能・音曲の一心に帰する所、万徳の妙花を開く成就なるべし。

一、祝言は、呂の声にて謡ひ出べし。深き習ひ有べし。まさしく、其座敷にての時の調子は有もの也。此座敷にてはいか程成べきがよかるべきと、勘へ見べし。先、心をよくそれになせば、一日二日稽古したる程にむかふ也。能能心を静め、調子を音取りて、謡ひ出べし。

　祝言は、直に正しくて、面白き曲は有べからず。九位にとらば、正花風成べし。喜阿が云出しける也。脇の能・祝言に有まじき節也。女がかりには似合ふべき歟。

　音曲の風体品品、本所あれば、聞書に及ばず。

　内にての音曲に、ほつたては一声也。定れること也。近比、古体とて、あまねくは申されず。「後のいはほをかさざれ石」の一声也。

　上げて遣る所をば延ぶると云、言ひ流す所をば永むると云也。待つと持つと、大半同じかるべし。揺りは十也。六・四也。

　甲の物なれども乙と付くること有。声に四重有時は、三重を乙と付くる也。早歌に有。猶猶、かくのごとくの法様、口伝有べし。

安全音と云こと、祝言のみとは思ふべからず。闌けたる位に上りて後は、幽玄・恋慕・哀傷、何も自在成は、安全成べし。此内、恋慕がかり、面白も、又大事也。闌けたるかかりは、又猶上也。大勢並み居て謡ふこと、皆上手也共、大勢具行は悪かるべし。

又、都良香の立合、昔よりの立合也。翁の言葉のやうにて伝わり来たるものなれば、たやすく書き改むべきにあらず。

　一、曲舞と小歌の変り目。曲舞は、立て舞ふゆへに、拍子が本也。曲舞には、横・主と分けて謡ふと、先心得べし。只謡は、節を本にす。相音と謡ふと先心得て、節をも付くべし。

　重衡に、「ここぞ閻浮の奈良坂に」、此「ここぞ閻浮の奈良坂に」の節、曲舞には有まじき節也。小歌節也。曲舞ならば、送りてひん訛らするやう成べし。西国下りの曲舞に、「芦の葉分の月の影、隠れて澄める昆陽の池」、「かくれて」と、句を持つ心根に謡ひしを、南阿、「曲舞節ならば、猶ひん訛らかせ」と申されける程に、それより今の節也。弱法師の曲舞、底性根は曲舞也。

曲舞は、次第にて舞初めて、次第にて止むる也。二段有べし。後の段は寄すべし。甲の物、「何の何して有ければ、かんのことのいかいかの」と、二斗、ないし三斗も、同じかかりに言ひて、さて「かかんのことの」と繰る也。ただ甲の物一にてやがて繰るは、悪き也。

　後の段の末、甲の物にならんとて前に有、上り節也。「とくとくと誘はれて、身を浮草の根を絶えて」なんど云所也。「有難も此寺に現じ給へり」、「有時は焦熱大焦熱の焔にむせび、有時は」など云所也。真実の上り節にては有まじ。さりながら、次第次第に上れば、上り節也。是皆、曲舞を和らげたる也。

西国下りの曲舞を、道の物取りて舞し也。其時は、「隠れて澄める」と送りける也。西国下り、面白曲舞也。「梟松桂の枝に鳴き」など、面白所也。

　観阿、節の上手也。乙鶴がかり也。南阿弥陀仏、節の上手也。喜阿は曲舞は舞はざりし也。小歌がかりのみ也。

東国下りの曲舞、「蓬莱宮は名のみして、刑戮に近き」、此段名誉の所也。「南無や三島の明神」より、面白き所也。節は那阿弥陀仏付く。西国下りは、観阿節を付く。皆作者は玉林也。鹿苑院の御意に違して、東国に下りて、程経て、此曲舞を書きて、世子藤若と申ける時、謡はせられけるに、将軍家、作者を御尋ね有て、召し出だされける也。西国下りは、後書かれける也。由良の湊の曲舞、山姥・百万、是らはみな名誉の曲舞共也。

一、ただだかかり也。昔の大和音曲は、さしてかかりなければ、文字訛りよく聞ゆ。かかりだによければ、訛りは隠るる也。「かやうにあだ成夢の世に、われらもつゐに残じ、何一時をくねる覧」、いづれも訛りたれ共、かかり有て、訛り隠るる也。南阿弥仏、日本一の音曲と言はれし謡也。喜阿が節也。

　道阿、「やうやうはかなやなどさらば、釈尊の出世には生ぜざる覧、つたなきわれらが果報かなや」、是を、いづれもきたなき音曲なれ共、かかり面白あれば、道誉も日本一と褒められし也。道阿、謡ひ届けし者也。

闌けたるかかりの有は、音曲長有て聞ゆる也。「老人答へ申やう、われは手名椎足名椎、女を稲田姫と云者にて候也」、「父の老翁手名椎は、源大夫の神と現はれ、東海道の旅人を、守らんと誓ひ給へり」、ちとも怖ぢず、くわくわと言ひたる、長有覚ゆと也。

「なにの何」と繰つて、ほろりと落す、南阿弥陀仏の節也。「河竹の流れの女と成、前の世の報ゐまで、思ひやるこそ悲しけれ」、平家節也。「念彼観音力、刀刃段段」の所、節も言葉も拍子も相応たり。音曲は、恋慕がかり、花香有也。

節と云は、竹などにも有やうに、先悪きことをもいふ。かかりが本也。づんと切つて引、延べうとて詰むる、皆かかり也。さて、かかりは何ぞと、立かへりて見れば、熊虎豹のごときの事也。

一、文字訛り・節訛り。「何の」と云てにはの字の訛りたるが、節訛り也。文字の訛りたる、文字訛り。文字もてにはの字も同じことなれ共、心得分べし。

　「松には風の音羽山」、此「松には風」の節、訛りたる由申せど、「秋の野風に誘はれて」、此「野風」、同やう也。よき節訛りは面白。させる感なきに、節訛りを置くべからず。歌にも、病に犯されぬ歌は苦しからず共いへり。

　「小野の小町は」の「は」、硬き文字也。言ひ捨つべし。「人の宿をば貸さばこそ」、言ひ掛けて落す、悪し。さやうのこともあれ共、ここにては悪し。「貸さば」の「ば」より下ぐべし。夏の祝言に、「うけつぐ国」、「つぐ」と当る、悪し。直に云べし。「三笠の森」の「の」文字、直成べし。「一念弥陀仏」の「念」、直に言へば硬し。かやうの時は、「ねん」と、拍子やうのかかり成べし。是は節也。「とりわき神風や、はじめたてまつり」、「たて」と当る、悪し。直に云べし。「恵み久し」、「久」と訛れば悪し。「春ごとに君をいはひて」、「はひて」と張るべからず。「ゆふべの風に誘はれ」、「ゆふべ」の「べ」を下べし。「老翁いまだ」、「いまだ」を直に云べし。「げにや皆人は、六塵の境に迷ひ」、「皆人は六塵」と、急に「わ」を言ひ捨てて、直に移るべし。「六塵」、下より言ふ、悪き也。「光源氏と名を呼ばる」、此「と」文字、律にて突くべし。同じ声にては突くべからず。南阿弥陀仏、面白しといはれし節也。「款冬あやまつて」、訛らかすこと有まじ。喜阿、音曲の上手にて時時申、まねをばすべからず。「公光と申もの也」、「物也」と云放つべし。

一、拍子の詰め開きは、たとへば、一間・二間・三間と、其間其間定れるがごとし。其内に、文字の足らぬをば延べ、文字の余るをば寄する也。猶猶深き口伝有べし。

「旅人の、道さまたげに摘むものは、生田の小野の若菜也、由なや何を問ひ紿ふ」、「由なや何を、問ひ給ふ」と続くるが悪き也。「由なや」と云切りて、「何を」と言ふべし。「由なや」をば寄すべし。

　「げに心なき海士なれ共、所からとて面白さよ」、「面」を持ちて、「白」を拾ふべし。「時知らぬ山と詠みしも」、かやうの「山」と云所、寄する也。いづれにも渡るべし。

かやうの所にて、音曲延ぶる也。富士の能也。

　「恐ろしや」と云所、りやうをかけてちうに言ふ所を、今程永むる、悪し。是より、かかりを体にして、ひつたと音曲にかかるべし。「ともの物狂と」、ここは節にかかるまじ。「言はれさせ」、「させ」と急に切るべし。

　「人間憂いの花盛り、無常の嵐音添ひ」の。「無常の」と移る所、悠悠としても延ぶべし。りやうかん大事也。「無常」の「む」を盗みて、「じやうの」といふ文字の先を切るべし。「寂寞たる深谷」、張るべし。八幡に「七日七夜」の所、「百王万歳」の所、寄せられし也。

　言ひ下すてにはの字を、下の句の文字頭に置くことも有。「かの昭君のまゆずみは、緑の色に匂ひしも、春や繰るらん糸柳の」、「の」文字、「柳」にて切りて、「の思ひ乱るる」と言ふべし。

鵜飼の能に、「真如の月や出ぬらん、真如の月や出ぬらん」、今の御所、馬場の能の時、下に早く言ひて、真中の坪に入ざりし也。「月や」から、きつきつと拍子にて持つて、「出でぬらん」と云て、行く足を宙に持つて、どうど踏む所也。かやうの所、下の拍子也。其能、入組の座並にてせしゆへ也。

　拍子大切のこと、大物の時見ゆ。ゑひといふ拍子にて、衆人の心一力にて押して行く、是、拍子の大切也。

一、「心根を知るとは、出息・入息を地体として、声を助け、曲を色どりて、不増不減の曲道息地に安位する所なり」と、風曲集にも有。

　飯尾の善右衛門とて、けんの弟子にて、早歌うたひにて有しが、上手也しかども、弟子選びの中へは入らず。「いか成変り目や覧」と尋ねければ、同じ弟子の物語とて、世子語られしは、「津の国の」と言ひ納むるやうの所の曲也。「津の」の「の」と、「国の」「の」との間に、息を引やうに云。引やうに聞えば悪がるべし。聞えぬうちを、上手は聞也。「国の」、「に」と「の」との間にも息を引。是にて心得べし。かやうの所至らで、選びに洩る。

　ただ一切、序破急を知るべし。文字一字に序破急有べし。人の物言ふ返事、「を」とやがて言ふは、序破急なし。声出ださぬ先、序也。はや「よ」と云所、破也。言ひ果つる所、急也。序破急なくば、届くべからず。

「横の声を主に謡ふことは、せめて易くやあらん。主の声を横に謡ふべきこと、いかが」と尋ねければ、主の声を横の声がかりに謡ひ成事は、調子を低低として謡ふべし。横・主の二の変り目も、わが声の変る時を心得て、言ひ渡すべし。たとへば、鎌倉声の、事によつて、正直に成時の有がごとし。

音曲をば、呂律呂律と謡ふべし。｛あひ見ばやと思ひて、果てし所を尋ぬれ共、うたかたの」、「うたかた」をば律にて言ひ出すべし。かやうの所を、同じ呂の声出しならば、悪かるべし。

　又、美しく謡ふ斗にて、止めにきつとなき也。きつと機にて止むれば、急有てよし。しからずば、破破にて止まる也。

　拍子を越し、たぶたぶと言ふを、人、面白しと斗思て言ふ程に、拍子延びて行く也。水鳥のやうに、下をばかせぎて、拍子を持つて、上を美しく言ふを、至らずして似する也。「とかや」と、「と」を引て云を、うら山しがりて、「とうかや」などひきずる也。

常盛の能に、物語、辨慶などの言ふことには変るべし。泣き泣き女問うことなれば、ほろりと云て、さるからけなげに有べき所に眼を着けて言ふべし。

布留の能に、「布留野に立てる、三輪の神杉と詠みしも、其しるし」といふ所、「布留野に立てる三輪の神」まで大事に言ひて、「其しるし見えて」と、やすやす軽軽と謡ふべし。

　班女に、「せめて閨洩る月だにも、しばし枕に残らずして、又ひとり寝と成ぬるぞや」、大事の底性根有。「成ぬるぞや」、面白かかり也。何も同じことなれ共、此曲舞、いづくも底性根ゆるかせ成べからず。「そなたの空よと」の「よ」をば、幼く、ちやと突くべし。「わが待つ人よりのをとづれ」の「を」文字、盗むべし。「よしや思へば」、「も」を持つべし。「班女が閨」と移る所、深くても浅ても悪かるべし。

　右近の馬場の能に、「花ぐるま」、「ま」にて永むる。「ま」大事の字也。松風に、「海士の家、里離れ成通ひ路」、「海士の家」を重く、「通ひ路の」を軽く言ふべし。重衡の能に、「鬼ぞ撞く成、恐ろしや」に、「撞く成」と突ゐて云はば、「をそろ」の「ろ」を納めて言ふべし。「撞く成」と直に云はば、「をそ」の「そ」に心を入て、突きて言ふべし。錦木の初めの謡、「くやしき頼み」の「き」、当らぬ也。直に云べし。いたはりて云所を似する程に、延ぶる也。土車の曲舞、硬き文字一有。拈弄すべし。

　六代に、「何をか種とおもひ子の」、ここには声枕を置くべし。今程、心拍子といへり。「をも」の下に声枕を一置きて、「おもひ子」の「い」を二突くべし。ここは、心を静めて、露程も心の塵あらば、悪かるべし。

　「天花に酔ゑりや」、「り」と切りて、「や」と謡ふべし。「しるしの松なれや、有難の口伝」、名の有文字移り也。「風波の難を助けしは」、ここは横主横と行く所也。「いかなれば道のくには」の「は」、ひきずる、きたなし。此「は」をば息にて引く也。［あしがりや］、同事也。高野の古き謡に、「春秋を、待つにかひなき別れかな」、此「春」の「る」を入べし。

「何とか出でん円月の、光の陰惜しめ」、かやうの所、曲也。ちうに云べし。此一うたひ、かかりて、軽く謡ふべし。「きづなも」などをも、幼な幼なと繰るべし。

松風に、「月は一、影は二、満つ汐の」、「満つ」と移る所に、声枕をちと持つべし。声枕とあらはれたるは悪し。心根に持つべし。

　桜川に、「曇るといふらん」、これはかひなめらかす所也。「もとの古根や残る覧」など、「平沙の落雁」、かやうの所、同じ。舌の根にて申所也、と喜阿申ける也。

　文字にて送る、きたなきこと也。機にて送る也。事によるべし。

又、人の前にて、道の者参会して音曲する、大事也。人の家にて、藤寿といふ、白拍子謡ひし時、長長と云納むる匂ひより、「千代木の風も静かにて」と謡ひ出だしけるを、みなみな褒美せられし也。あなたを序になして、小謡など云納めたらば、はたと上げて謡ひなどし、かく違へて、其匂ひを心にかくべし。あなたの云納めの字の韻を、能能心得べし。

　ある貴所にて、酒盛の時、「世」と有に、幾度も言葉の下より謡ひ出しけるに、「心隙なく謡を用意し持ちたる、かくてこそ動転有まじけれ」とて、褒美せられし也。

　祇園の会の時、若、御所の御前にや参るべき、内内用意の時、喜阿来りて、談合せられしは、異役人もなからんには、祝言一うたひ過て、指事の序より謡ふべし。曲舞有上に、余の申楽あらんには、祝言一うたひ過て、軈て「人皇五拾代」と、曲舞より謡ふべし、と談ぜられし也。

　一．位の事。風曲集云、「無文音感は、有文共に籠るがゆへに、是を第一とす。有文音感は、無得までには極めぬ所の残るがゆへに、第二とす」と云云。「其位とは、四声・呂律より、句移り・文字移り、ことごとく極め尽くして、安き位に成かへりて、其色色は意中の正根に籠りて、さて、聞所は声がかりの無曲音感のみ成所、是無上也」と云云。又、不覚の無文有。それにてはなし。其は音曲聞ざめすべし。

　されば、ただ、美しく吟にかなひたる音曲、上果也。曲はなき也。至り至りて、安き位に成て、節より自然に出で来るもの也。影のやう成もの也。然を、人の、曲を面白しと思て、曲を体にして稽古する、浅ましき事也。

松風に、「寄せては返る片男波、芦辺の鶴こそは立騒げ、四方の嵐も音添へて、夜寒何と過ごさん」など、面白節なれ共、はや第二に落つ。此「四方の嵐も音添へて」、寄すべし。声に硬き位有。上より言ひて落す也。喜阿がかり也。此節、喜阿がかり謡ふ人は、猶奸むべき歟。下より「夜寒なに」と云は、細河右京兆直されし也。稲荷の能の頃也。此論義、昔の藤栄の論義也。音曲苦みぶるやう成こと、其癖癖の面白也。

　又、ただこと、白声共云。言ふ者なし。上の位也。習ふべきことにあらず。喜阿も、「難波の芦を御覚翫こそ返返も優しけれ」など、大かたに申ける也。真実に成かへり、一塵も心なく、実盛などに、「名も有らばこそ名乗りもせめ」などやう成、昔もなかりける也。此「せめ」、沙汰有し所也。いづれと申ながら、殊にかかる位、世子一人のもの也、と右京兆も仰せける也。

一、能書く様。「其筋目を能能思ひ分べし。其人体人体の程を見分べきこと、能を知らではかなふべからず。是一大事也」と、三道にも言へり。能の新作の本は、三道に詳しく有。

先、祝言の、かかり直成道より書き習ふべし。直成体は弓八幡也。曲もなく、真直成能也。当御代の初めのために書きたる能なれば、秘事もなし。放生会の能、魚放つ所曲なれば、私有。相生も、なをし鰭が有也。

　祝言の外には、井筒・道盛など、直成能也。実盛・山姥も、そばへ行きたる所有。殊に、神の御前、晴の申楽に、道盛したき也と存れ共、上の下知にて、実盛・山姥を当御前にてせられし也。井筒、上花也。松風村雨、寵深花風の位歟。蟻通、閑花風斗歟。道盛・忠度・よし常、三番、修羅がかりにはよき能也。此うち、忠度上花歟。

　西行・阿古屋の松、大かた似たる能也。後の世、かかる能書く者や有まじきと覚へて、此二番は書き置く也。

　石河の女郎の能は、十番を一通りして、中年寄りて、元雅すべき能也。千方も、年寄りて、しみ出で来てすべし。石河の初めの出立、身をやつしたる体成べし。夏ならば、彩みて縫いたらんかたびら、側へつんがうてよかるべき歟。水衣をちちと彩みたる体もよかるべき歟。近江ならば白帽子成べきや。こなたにてもめづらしかるべし。後ちと弱き歟。女に物を言はせたきや。主元雅のままに問うべき也。「恨みは末も通らねば」より、新座向きに、なをさらりと謡ひ度歟。是にても苦しからず。節聞く時也。

　西行の能、後はそと有。昔のかかり也。砧の能、後の世には知る人有まじ。物憂き也、と云云。

　かの十番、遺物の為書き給ふ能なれば、殊に本成べし。能・音曲、わが一流の本風たるべき由申さる。

　小町、昔は長き能也。「漕ぎゆく人はたれやらん」と云て、なをなを謡ひし也。後は、其あたりに玉津島の御座有とて、幣帛を捧げければ、御先と成て出現有体也。是をよくせしとて、日吉の烏大夫と言はれし也。当世、是を略す。道盛、言葉多きを、切り除け切り除けして能になす。丹後物狂、夫婦出でて物に狂ふ能也し也。幕屋にて、にはかに、ふと今のやうにはせしより、名有能となれり。然ば、能も当世当世を心得て笠間の能、今程不相応か、昔はかく成とのみ心得べからず。

　「応永年中の所作、末代にもさのみ甲乙あらじ」と、三道にも言へり。然ば、此新作の能共を、本意に失はずして、当世をちちと色どり替うべし。

一、能を書くに、序破急を書くとて、筆斗に書くは悪き也。風情の序破急を書くべし。さてこそ、序を破りたるにて有べけれ。筆のみの序破急は、聞所は面白けれ共、風情なし。筆と風情とあひかなひたらんは、是非なし。「玉水に立むかへば」など書き、「東にむかゐ、又西に」など、風情に成体を心得て書くべし。

書きて行くに、言葉に花を咲かせんと思ふ心に繋縛せられて、句長に成也。さやうの心を思ひ切りて書くべし。須佐之男の謡を、よく書ける也。「神代には天照大神のせうとの神とあらはれ、人の代には日本武の尊、異国を攻め」など書きて、其れより東のことを書くべきを、打捨て、曲舞の末にて、「八剣の宮と申」なんど、前後前後して、曲舞の内に一建立を書ける也。順路順路を追ゐて書かば、句長に成て悪かるべし。此分目を心得べし。

　布留の能に、僧・女、布を洗ふ問答より、順路ならば、布留の剣の謂れを謡ふべきを、「初深雪、布留の高橋」と謡ふこと、遠見を本にするゆへ也。本木に名所のほしきは、かやうの遠見の便りのため也。又、其まま謂れより謡ふ共風情に成べき本木ならば、謂れをも謡ひ出すべし。曲舞の序に、「抑布留とは」と云、御剣など謂れを謡へば強き也。「初御雪」と謡ひぬれば、軈布留が出で来て能に成也。実盛に、髭洗ふより、順路ならば合戦場に成体を書くべきを、「又実盛が」など云て、入はに戦うたる体を書く、かやうの心也。

　又、二切れにて、入替る能は、書き易き也。其ままする能には、目に離れたる所を書くべし。是大事也。それがなければ、ぬなりとして悪し。松風村雨などぞ、其ままにて入替りたる能成。「憂し共思はぬ」、言捨ててひそとして有所也。かやうの所を、能能うかがふべし。

　又、源氏屋島に下ると云ことに、遠見を本に書きしを、軍陣に出で立つ者、逍遙の気に変るべし、と云云。

守屋の能に、「守屋の首を斬る」と云所、ここをば、節にて首を斬るべき所也。井阿弥生れ替りても知るまじき也。守屋と論義に云て落しべし。無窮子細に云云て、「首を斬る」と云て、さつとして入べき所也。

　又、曲舞果てて、謡論義にかかる所、繁ければ、引替へて、言葉よりかかる風体を書くべし。神など化したることには、言葉にてかかるがよき也。

　吉野のことをば春の事に書き、立田のことをば秋の体に、富士をば夏の体に書くべし、と也。

又、切拍子は、舞とはたらきを見せん為也。書手も為手も心得べきこと也。今ほどの書手、有まじきことを書き入る也。

　開口に、「又君は、武運めでたくましますにより」、此「又君は」と云によりて長き也。「一天泰平の御代」にて君のこと也。ただ長きが悪き也。さりながら、事によるべし。松風村雨、事多き能なれ共、是はよし。何事をも心分て、さて中を心得べし。前後し前後し書くにも、あまりにぶつきりに、継ひだるやうには有まじき所を心得べし。ただ言葉の匂ひを知べし。文章の法は、言葉をつづめて理のあらはるるを本とす。

一、音曲に、一句一句の体を違へんとて、それ斗知て、総体を知らず書かば、また音曲こし地はむべし。二句斗同じ向きに云て、ぎくりと節を替ゆべき所も有べし。ぎくと替ゆべきために、二句斗同じかかりに言ふは、又面白し。

又、其人体人体を分て書くべき言葉有。初瀬の女申楽に、「そもそも和州長国山と申は」と書けるを、鹿苑院将軍家、女の能に長国山と書ける、言葉硬き由、仰せける也。されば、女の能などをば、「大和初瀬の寺」など、幽玄に書くべし。

　又、同じことを書くべからず。「年をふる野の」と書きて、「雨のふるの」など書くべからず。業平の能に、「昔に業平の」など書きて、「なにに業平の」など、同じかるべし。其能の肝用の開聞の所に一つ書くべし。「甲斐も波間」、「其心更に夏川」、「助くる人も波の底」、三所まで同じ言葉有。せめて「甲斐も亡き身の鵜舟漕ぐ」など云べし。

　松が崎の能に、「松が咲きけり」と云言葉、此松が崎の能に規模なれば、人の耳によく入れんために、「そもや常盤の花ぞとは」など、先論義に匂ひをあらせて、よき言葉を書けばよき也。匂ひもなくて、事のつゐでに其能の規模の言葉をちやと書けば、人も聞きとがめず、悪き也。八島の能にも、「よし常の憂世の」といふ言葉は、規模なれば、「其名を語給へや、わが名を何」と先聞せて、扨「よし常の」と書けば、誰が耳にも入て、当座面白也。

ただ、能には、耳近成古文・古歌、和歌言葉もよき也。あまりに深きは、当座には聞えず。草子にては面白し。

「は」、「わ」の字にてする事有べからず。能を作書せん時心得べし。「は」と「わ」とにてかなはざらん時は、心得て、囗を少し窄めて云べき也。

　かかる所、文字の声を心得て節を付くべし。前の句を商の声にて云立てば、後の句を角の声にて云などする、如此心得て作書べし。

八幡　相生　養老　老松　塩釜　蟻通　箱崎　鵜の羽　盲打　松風村雨　百万

檜垣の女　薩摩の守　実盛　頼政　清常　敦盛　高野　逢坂　恋の重荷　佐野の船橋

泰山府君　　是、以上、世子作。

小町　自然居士　四位の少将　　以上、観阿作。

　静　通盛　丹後物狂　　以上、井阿作。

　浮船　是は素人横尾元久といふ人の作。節は世子付く。

是、新作の本に出だされたる能也。三道に有といへ共、作者を付く。

又、鵜飼・柏崎などは、榎並の左衛門五郎作也。さりながら、いづれも、悪き所をば除き、よきことを入られければ、皆世子の作成べし。今の柏崎には、土車の能世子作の曲舞を入れらる。四位の少将は、根本、山徒に唱導の有しが書きて、今春権の守多武嶺にてせしを、後書き直されしと也。佐野の船橋は、根本田楽の能也。然を書き直さる。昔能也しを、田楽もしければ、久能也。

詳しくは三道に有。此三道は、応永三十年に書かれし程に、それより後、本に成ベき能、いくらも有べし。

一、勧進の桟敷数、をよそ六十二三間也。間の広き事、五尺也。然れ共、近代、七十間余に是を打つ。是は、見聞の人数をあまねく寄せんため也。田楽喜阿は、五十四間より外は打たせざりし也。是は、声かなはぬ者なれば、音曲をよく聞せんがため也。糺河原・冷泉河原など、本あれば、能能うかがふべし。是は、幼くて聞書也間、委細ならず。よくよく尋ねべし。

　桟敷をも、かたかたと打廻して、つまやかなれば、声も籠り、能もしむ也。橋は、幕屋口を高く据ゑ、低く直に掛くべし。中高に反るは悪き也。橋の詰めは、舞台の日隠しの柱の中てよりは側へ寄せて、片側の柱半間斗置きて掛くべし。舞台は、前後左右へも寄らず、桟敷の中程成べし。何とするも、声は正面へよく聞ゆるもの也。大寄りには声後へは聞えず。心得て音曲すべし。能以前、舞台・橋を能能見したため、釘など、其外、あやうからん所を直すべし。大勢の座は、舞台よりはいささか切り下げて、畳を敷き、脇の為手など謡ふ所には、よき氈などを用られし也。

　翁の装束、真実の晴の形は、定て別に口伝有べし。さのみてばてばしくはなかりし也。しとやかに出で立べし。金襴などは、さして見及ばず。色は正色成べし。

　翁面の箱持こと、賞翫の職也。大かた見様のよきを選ぶべし。若に以相たる職也。烏帽子直垂の衣文、いかにも正しくて、出仕すべし。

　翁の礼は、橋の詰めにて、扇取直し、礼を成て、着座せられし也。

　露払は、其比、槌大夫舞し也。上手なれば、脇の為手の内にも舞ふとやらん、うけたまはりし也。二番続けて舞こと有。浅しき田舎事也。

　翁をば、昔は宿老次第に舞けるを、今熊野の申楽の時、将軍家鹿苑院、初めて御成なれば、一番に出づべき者を御尋ね有べきに、大夫にてなくてはとて、南阿弥陀仏一言によりて、清次出仕し、せられしより、是を初めとす。よつて、大和申楽、是を本とす。当世、京中、御前などにては、式三番、ことごとくは無し。今は、神事の外はことごとく無し。

「ひろ斗や」の所をば、京にても下より言ふべきこと也。舞過て、面を脱ぐをも、役人にあらざる者取り渡して、箱に納むべし。鼓打など取渡すこと、返返有まじき也。箱持の受け取べきこと也。翁の入にも、面箱の役の連れて入べき歟。重ねて問ふべし。箱をば、式三番過て入べし。翁は、舞果てて、面脱ぎ、褄尺取、正面へ礼して入也。猶猶能能尋ねべし。ここらは、大かた、見しままを記録す。

三番猿楽、をかしにはすまじきことなり。近年人を笑はする、あるまじきこと也。

就中、連座の輩、声をもー同に合わせ、為手の衣文の悪きをも、心にかけて直すべし。もとより他衆交うべからざる上に、なを鼻の先をまもり、一大事と心に持つべし。声合わする所所は、定まりたるごとし。知らざらん所をば、為手に尋ぬべし。大かたは、謡い出ださん時と、云納めて後と也。ばらばらなるは悪し。よくよく故実をめぐらし、番を守るべし。出役人等のことは、なをなをよくよく尋ねて記し置かるべし。これはただ見及びばかり也。

御前の能には、鼓・太鼓など、かねては庭に出だすまじ。役人さらぬ体にて持ちて出づべし、と申されし也。大略は若衆のする也。

面箱の役、幼きには斟酌せさせすべし。重き物は見所あやうきゆへ也。出入に跡をかへり見ることなど、有べからず。能能、執すべし、執すべし。

一、能の役人等、其外、禄物等の定めなどは、記せられたるものあれば、聞書に及ばず。

其外、色とりどりは、脇の能、大臣には、先は上下水干成べし。つれ大臣は大口也。牛大夫は、開口言はんとては、鼓打の方へ向き、つくばひて、鼻かみて、置鼓打止めさせ、声合はせて言ひ出しける也。言葉いひ、次第取て、又言葉をいふこと、二重に成所を知べし。次第の後、軈謡ふべし。

　ただ、脇の為手も、狂言も、能の本のまま、何事をも言ふべし。文盲にして、輪説まじる故に悪し。後の出はの、橋がかり、指声・一声より移る所は、脇の為手のもの也。受け取所悪きは、脇の為手の難成べし。

　脇の能過、二番目などは、僧二人もよし。三番に成ぬれば、僧などは一人に過べからず。

女能には、小袖をも長長と踏み含み、肌着の練などをも、深深と引廻し、閉ぢて、首筋より下、肌を見すべからず。肌着をわが肌にしなすべし。鬘帯の広きだに見苦しきに、赤き帯などする、返返俗也。又、帯などの先、かたちぐ成所、心得べし。狩衣の時は、下になるとて、ゆるかせ成べからず。

　能に、色どりにて風情に成こと、心得べし。蟻通など、松明振り、傘さして出づる、肝要ここ斗也。扇などにてしては悪かるべし。花筐の能には、花筐をいかにも執すべし。常盛の能、船を青練貫などにて、ちと飾るべし。隅田河の能、あまりに初めは色なき能なれば、此旅人などには、大口を着てもよろしかるべし。鵜飼の初め、直面に竹笠着る、かやうのことは、田舎などにてのこと也。時によるべし。

　又、能に、余に目慣れたる姿を替えんとて姿を替ふるを、見つけぬとて、押していつものやうにすること、一偏也。黒髪、今程あまりに多くて目につく也。能によりて、風情をちちと色どり替ゆべし。背などの低き者、脇の大臣などに、風折を折り含めとして着る程に、いよいよ見苦し。高からん為手は、又心得べし。

　近比、近江に岩童也、京中に勧進の時、船の櫂に、絹やらん布やらんにて包みて、上を帯にて搦みしを見て、桟敷に見物衆の有しが、其まま帰られし也。かやうのこと、心得べし。犬王、柴船の能に、二すろかをたぶたぶと削りて、船差に成て漕ぎし、面白かりし也。

近比、将軍家御前にて、人三郎也の、鐘の能をせしに、・南向き成に、鐘を右の方に置く。左鐘に撞きし也。幾度も、左に置きて右鐘に撞くべし。

又、逆髪の能に、宮の物に狂はんこと、姿大事也し程に、水衣を彩みて着し時、世に褒美せし也。それより殊ほかにはやりて、塩汲など云能に着る、はなはだをかしきこと也。能によりて着べし。空也上人の能などに、錦紗を帽子に着る、是も何とやらん悪し。ただ、角帽子の縫物を略して、年寄しく、濁らかして着べし。衣なども、薄墨なんどに染めて着べし。犬王、念仏の申楽に、絹の衣に、長長たる帽子深深とせし、面白かりし也。

　又、児なんどをばはに出だすべからず。ことに鹿苑院御嫌ひ有し也。然共、声につき、出でずしてかなはずば、大口を着せて、役人連れて出づべし。

　下にて謡ふ者は、鳥帽子着べからず。大勢に紛るる也。詳しくは記したる冊子を見るべし。

又、何としても、思ひ倣しを能、奥近う心得べし。幕屋などをも、能能塞ぎて、人に見せ度もなし。女などに美しく成たれ共、まさしく、幕屋にて裸に成て、大汗だらけなれば、匂ひ少なく、思ひ做し悪き也。

内にての音曲には、坐断し、右に扇を持て、左には尺八を番ゑられしが、尺八の口を衣の袖の内に引入、指にて衣の袖の口を押へられし也。貴人の御前などにては、ひざまづきもせられし也。かやうのことは、なをなを能能尋ぬべし。火打袋は金襴也。かやうの物、舞の色に成也。

一、面の額、長こと有まじき也。今程、惜しきとて切らざること、をかしきこと也。上に物を着るに、烏帽子・冠なれば、額中に着るものなれば、退きたるは、巴に成て悪し。頭をかけたれば見えず。乱れたる髪の中より見ゆるにつけて、額高きは悪し。長か覧面をば、上を切るべし。

一、習道書に、種種の定あれば、委細書き置かず。笛のことにつき、年寄・童と有は、観阿・世阿両人のこと也。少将の能とて、丹波の少将帰洛有て、「思ひし程は」の歌詠みたる所の能也。

　又、狂言には、大槌、新座の菊、上果に入し物也。菊初若の能に、此能は、子を勘当しけるが、親の合戦すと聞て、由比の浜にて合戦して、重手負ひたる能也。「あの囚人はいかなる者ぞ」と言はれて、「恐ろしく候」と云、寄りて見れば初若也。それよりしめり返りて、親に此由を告げしを、思ひ入、其比褒美有し也。狂言も、かやうの所を心得べし。

　後の槌大夫は、鹿苑院御覧じ出されたる者也。狂言すべきものは、常住にそれに成べし。きとして、俄に狂言にならば、思ひ倣し大事成べし。後の槌、北山にて、公方人、高橋にて行合たるに、「槌なり」とて、扇かざして通られしを、側へ寄りて、そと見て、又扇かざしてわれも通りし。かやう成心根、上手の心也。

　右、以上、出世上果之風義也。

一、田舎の風体。金春権守・金剛権の守、つゐに出世なし。京中の勧進にも、将軍家御成なし。金春、京の勧進、二日して下る。金剛、南都にては、立合の時も、二番にてさてをかる。是も、其比、道の盛ん成時の、上の手柄、一のこと也。今の世は、道なくて、日比能能せぬ者も、殊によりて押し出してする。出世には変るべし。

　金剛は、嵩有し為手也。あまりに嵩過て、過張成所有し者也。

　金春は、舞をばえ舞はざりし者也。曲事をせし為手也。「扇たたかせ、鳴るは滝の水」と云て、舞さうにて、「わが子小二郎か」と云て、さと入などせし、何共心得ぬ由、其比沙汰す。「桐の花咲く井上の」とて、笠前に当て、きと見し、さやうの所を心にかけてせし為手也。金剛が方より、あまりの事とて難ぜし也。内の舞などをも、ちらちらきりきりと、返りなどして止めし、「そもかやうに曲すべき座敷か」と、赤松方など申されし也。「あらなつかしのあま人やと、御涙を流し給へば」、此「御涙」の節、金春が節也。あまりにくだくだ敷ことをば、長長書き載せず。同じ能に、「乳の下を掻い切り、玉を押し込め」などのかかりは、黒頭にて、軽軽と出で立て、こばたらきの風体也。女などに似合はず。

　金剛は、何をもせし者也。尉のかかり也。論義そぞろと謡ひし所也。雲林院の能に、「基常の、常無き姿に業平の」とて、松明振り上げ、きといなりし様、南大門にもうてざりし也。近江の別当が舞を似せける也。舞、きりきりたぶたぶと、捻ぢつけて舞いし也。

彼両人のこと、ひそかに聞しことなれ共、京・田舎、善悪をわきまへん為に、書き置く所也。是さへ詳しきことをば書き載せず。内の舞にも、膝拍子・膝返りなど、京にてせし者也。

又、狂言には、よしひとうゑと云、あさし也と也。京え連れて上らず。「槌がうつべきほどに同道なきか」など、京知らぬ者はかける也。されば、かつてみやうたいこにて、つゐによくもなし。傍輩を笑はせしし者也。かやうなることにて、京・ゐ中の変り目を存知せば、又このー段、大切なるべし。与二郎、よつ、長ありし者也。ろ阿は上手にせし為手也。

又、十二権の守、下三位也しかども、自然に中上にも上りし時有し者也。世子一言によりて、鬼を砕動を得てせし者也。正長元年に、御前に召し出されて、能よかりし時、世子の方へ状有。其状の文章。

　久見参に入らず候。御ゆかしく存侯。此度、長長御目にかかり、詳しく申度こと侯て、両度参て侯。御出の時分参候て、御見参に入ず、所存の外に候。此度召し上せられ候。当年のことは、いよいよ老耄仕候。かたがた斟酌にて侯。其由をも申候へども、上意にて候間、不及力参、度度能仕候。上意其ほかの御沙汰、子細なく候事、老の面目にて候。兼又、かやうの事につけ候て、申度子細候。かやうに年寄り候迄も、子細なき御意に預候事、一向御扶持にて候。先年、身の能の事、御指南を憑入候しに、うけ給候し、北山の時分御懇にうけ給候し事、今に忘れず候て、其心にて今まで仕て候。乍去、たとい其心候共、身に似合はぬ能を仕候はんには、今程の御意に合ひ候間敷候。身のため、得手向きの能あまた御書き候て、仕置きて候。左様の能共、皆皆人人もしられて候。人の御能にては合ふまじく候。似合ひたる能にて候はずば、得たる坪へは入間敷候。是一向御扶持にて候。心中に存候事、申度候て、両度参候しに、御留守の時参合候事、御心元なく候。身は本より片仮名をもえ書かず候。状更になをなを書き得ず候程に、人に書かせ申候。定て言葉に足るまじく候。参候て申度候へ共、御いとま申て候。長長逗留不可然候て、夜のうちに下り候程に、状を預け置き進之候。ふと御下向も候はば、懸御目、詳しく申べく候。期見参時候。　恐恐謹言。

八月四日　　康次判

又、袖書云、

猶猶、かやうの事、状は申立がたく侯。御目にかかり、申べく侯。身の一期の間の御扶持、孫子までも忘れ申間敷御ことにて侯。返返畏入候。

世阿弥陀仏へ進之上書、腰文也　十二

道を持てる者の意地、如此。

　犬王は、毎月十九日、観阿の日、出世の恩也とて、僧を二人供養じける也。観阿、今熊野の能の時、申楽と云事をば、将軍家鹿苑院御覧初めらるる也。世子十二の年也。

一、面のこと。翁は日光打。弥勒、打手也。此座の翁は弥勒打也。伊賀小波多にて、座を建て初められし時、伊賀にて尋ね出だしたてまつし面也。

　近江には、赤鶴さるがく也、鬼の面の上手也。近比、愛智打とて、座禅院の内の者也。女の面上手也。

　越前には、石王兵衛、其後竜右衛門、其後夜叉、其後文蔵、其後小牛、其後徳若也。石王兵衛・竜右衛門迄は、たれも着るに子細なし。夜叉より後のは、着手を嫌ふ也。金剛権の守が着し、文蔵打の本打也。此座に年寄りたる尉、竜右衛門。恋の重荷の面とて名誉せし笑尉は、夜叉が作也。老松の後などに着るは、小牛也。

　愛智の打手、面共打て、近江申楽に遺物しけるが、大和名人とて、世子の方へ、岩童して送りし遺物の面、今宝生太夫の方にある女面、顔細き尉の面、是也。時時、源三位に彩色きて着られし也。男面、近比よき面と沙汰有し、千種打也。若男面は、竜右衛門也。

出合の飛出、此座の天神の面、大癋見、小癋見、皆赤鶴也。大癋見をば、他国よりは大和癋見と云。此面也。大癋見、天神の面、もつぱら観阿よりの重代の面也。飛出は、菅丞相の柘榴くわつと吐き給へる所を打。天神の面、天神の能に着しよりの名也。人の借り召されしを、不思議成霊夢有て、返されし面也。家に納めたてまつれ共、又霊夢有て、今も着る也。小癋見は、世子着出だされし面也。余の者着べきこと、今の世になし。彼面にて、鵜飼をばし出だされし面也。異面にては、鵜飼をほろりとせられし也。面も、位に相応たらんを着べし。

　此座の、ちと年寄しく有女面、愛智打也。世子、女能には是を着られし也。猶猶名誉の面ども有べし。

一、大和申楽は、河勝より直に伝はる。近江は、紀の守とて有し人の末也。さて紀氏也。時代、能能尋ぬべし。

大和、竹田の座、出合の座、宝生の座と、うち入うち入有。竹田は、河勝よりの根本の面など、重代有。出合の座は、先は山田申楽也。伊賀の国、平氏也服部の、杉の木と云人の子息、おうたの中と申人、養子にして有しが、京にて落胤腹に子を儲く。其子を、山田に美濃大夫と云人、養じて有しが、三人の子を儲く。宝生大夫嫡子、生市中、観世弟、三人此人の流れ也。彼山田の大夫は、早世せられし也。

　金剛は、松・竹とて、二人、鎌倉より上りし者也。名字なし。猶猶尋ねて記し置くべし。

近江は、敏満寺の座、久座也。山科は、山科と云所の悴侍成しが、敏満寺が女と嫁して、申楽に心ざして、山科の明神、春日にて御座歟、籠て進退を祈る。烏社壇の上より物を落す。見れば翁面にてまします。此上はとて申楽に成。嫡子をば山科に置き、弟をば下坂に置き、三男をば日吉に置く。其より三座の流れと成。然共、山科総領なれば、日吉の神事、今に正月朔日より七日に至る迄、山科独して翁をす。彼面也。此能は、昔の山科、夫婦連れて大晦日に籠りし時、三歳に成子頓死しければ、末代迄、子子孫孫に於きて、正月朔申楽を勤むべきと、祈念しければ、蘇生せし、其願也。今の岩童祖父、下坂と云名字を除きて、日吉と号す。近比、山よりの下知といへ共、無念成こと也。敏満寺、大森、酒人。下三座。

　丹波のしゆくは、亀山の皇帝の御前にて申楽をせし時、長者になさる。新座・本座・法性寺の三座の長者也。道の面目、何事か是に如かん。河内の榎並の馬の四郎は、梶井殿やらん、能も不覚、重ねて尋ぬべし、馬の紋を給はる。

　道阿の道は、鹿苑院の道義の道を下さる。世阿は、鹿苑院、「観世の時は、世、濁りたる声有。爰を規模」とて、世阿と召さる。其比、勘解由小路殿武衛、兵庫にて御犬の検見に、将軍家、御着帳自筆に「先管領」と遊ばされしより、今に先管領と云。同じやうに御沙汰、世子面目の至り也。亀阿は、亀夜叉と云しによりて、喜阿と也。観阿は、還俗の内、早世あり。

一、応永十九年年能も不覚、重て尋ぬべしの霜月、稲荷の法性寺大路の、橘倉の亭、過ちより大事に成て、罷るべき時、稲荷の明神憑き給ひて、女房たち也、観世に能をさせて見せば平癒有べきと神託にて、稲荷にて申楽す。彼女性云、「十番すべし。三番をば伊勢に見せたてまつり、三番をば春日に見せたてまつり、三番をば八幡に見せたてまつり、一番をばわが見べき」と神託有て、十番せし也。世子彼家に礼に罷りしを、内にて、「観世来りたり」とて召し入、赤き絹を下し給はる。今に此絹あり。

又、応永廿九年霜月十九日、相国寺のあたり、檜皮大工の女、病重かりし時、北野聖廟より霊夢有て、「東風吹かば」の歌を冠りに置きて、歌を詠みて、すすめ歌也、観世に点取りて、神前に籠むべきと、あらたに見しかば、歌を勧めて、縁を取て、世子に点を取る。否みがたくて、行水し、合点せし也。其比は、はや出家有し程に、「夢心に観世とはいづれやらん」と思ひしを、「世阿成と仰せけると見て有ける」と云云。

　又、藤若と申ける時、大和多武峰の衆徒の、重代の天神の御自筆の弥陀の名号を、天神より霊夢二度に及とて、渡さる。今に是有。文字は泥也。

かやうの事、ことことしきやうなれ共、道の神に同ずる処の支証のために書き載す。遠くは秦の氏安、初瀬の滝蔵権現の納受有しと申伝えし後、かやうのこと聞及ばず。

一、田楽は、坂の上の良阿法師、山の力者也が、東塔に参りけるに、開き笠着、赤き物着たる者、棒の先に乗り、刀を廻らすと見て、青蓮院にて申ければ、「さらば汝学ぶべし」とて、十三人の力者、是を学ぶ。それより此道起る。

有説には、日吉御臨幸の御時御供せし、可尋何とやらんの流れ也。それによりて、今に彼神事に、田楽三人、黒き面を首にかけて渡る也。

　一忠以前、たうれん、かうれんとて、名人有ける也。いづれも本座の者也。花夜叉・藤夜叉は、新座の者也。

一、松囃子、今は家なし。祇園の会の時のこそ本に成べきを、永享二年正月、御所の御松囃子に、たれも、家なしとて、少少世子に問う。音頭の節、祝言に直成べし。「松は風、収まりて雲も稲荷山、収まりて雲も稲荷山、収まりて雲も稲荷山、栄行く御代の花衣、春ぞめでたかりける」、かやう成べし。然共、今度はちと長かりし也。

一、南都薪の御神事は、昔は時節定まらず。夏なども有し也。されば、合ふ申楽なかりし程に、清次を召されて御糺明有べき由有し時、子細を申。其時より、「げにも、申楽堪忍、不便」とて、二月になさる。其時、二月ならば末代闕き申まじき由、定申しあひだ、此座に於きて、二月の神事ならば、闕くべからず。

一、永享元年三月、薪の神事。五日、一乗院にて、円満井・魚崎、両座立合の時、脇は鬮也。結崎取り当りて、観世大夫元雅、八幡放生会の能をす。それも、先年、寺務の能を引く。大乗院へは、一座一座参りし程に、脇の沙汰なし。

一、申楽常住の歩きに、今ほど、小者に太刀を持たせてある、似合わぬこと也。道阿小者に打刀を持たせけるを、珠阿弥陀仏、折檻しられける也。されば、ただ、よき袋に着替入て持たすべし。げにとさやうのものなくてかなはざらん時は、なんの短き打刀ささせて連れべき歟。それも昔はなし。かやうなればとて、あまりに、近江申楽は身を持ち下げて、近江なんどにては、山法師の若党のやうなり。それにてはなし。身の分際をはからうべし。ただは着のままなり。わが身の分際を顧みべし。

　神事を本にして、貴人の御前などにては、御意のままたるべし。しかれども、恐れたる心中あらわれずば、又尾籠なるべし。細河武州の御前にて、当道の中に礼を申ける時、「かかる尾籠の者はなき」と仰せける也。人の挨拶大事なるべし。自然、他座の者御賞玩などの儀あらん参会には、番をもつくろゐて、ちやとはづれなどし、時分時分をうかがうべし。さやうの所猥んにては、ことにさて也。増阿勧進の時、「岩童、大勢連れて上の御桟敷の下へ参る」とて、沙汰ありしこと也。「観世ひとり参る、名人なり」と沙汰あり。

この道は、礼楽にとらば楽也。人の中をにつことなすべし。しかれば、色知りにてなくば、住する時節あるべし。鹿苑院の御思い人高橋殿東の洞院の傾城也、これ、万事の色知りにて、ことに御意よく、つゐに落目なくて果て給いし也。上の御機嫌を守らへ、酒をも、強ゐ申べき時は強ゐ、控うべき所にては控へなど、様様心遣ゐして、立身せられし人也。かやうのことは、世上に沙汰することを記す。世子、かやうの所、ことに名人なりとて、みなみな褒美あり。

一、たとへ、天性の名人なりとも、稽古の次第次第、道に立ち入て沙汰せずば、末あるまじきなり。そのー人は名人なるべし。されば、名人の中に、多くは末なきこと多し。ただ、中初・上中・下後と稽古して行ば、始終よろしかるべし。みな下から入ゆゑに、道絶ゆるなり。よくよく慎むべし。

一、上下とて、神事をそばになして、あるひは遅く上り、あるひは春日の御神事にはづる。かかる故に、いよいよ生死悪し。たとえ一旦よくとも、始終罰を当るべし。神事を本にして、その間の身上助からんための上下なり。

又、神事の願の翁など、聊爾にする。そと舞いて百文づつ取る。願少なければ、つらくさなどする。かかるせをばいかがすべき。かやうの心中持ちたらん人は、始終あるまじき也。来らん世には悪所に赴くべし、と云云。

　好色、博奕、大酒、鶯飼うこと、これは清次の定也。

定　魚崎御座之事

右。長酒、拾貫文。権守酒、三貫文。大夫酒、下は二貫文也。上はたけだけに従つて、盛らせ給うべき也。

一、多武峰の四かうの事。二日にーがうづつ。また、四かう肴、一がう、長殿取らせ給うべし。又、頭屋の果物、一がうづつ、高坏の据物、染物なりとも布なりとも、三頭屋に一頭屋、長殿取らせ給うべし。また、四かうの飾り造り物あらば、よからんものをー、長殿取らせ給うべし。又、次の造り物をば、識事取るべし。三ともあらば、二座より六位まで、配きて分くべし。うち、馬あらば、とかく、千、長の殿取らせ給うべし。大瓶、二日のうちに、よからんずるをー、長殿召さるべし。また、一をば識事分けて取るべし。

一、得分の事。三、長殿。二、端居。三座、一分半。また、一を三に分けて、四座より六位まで、分けて取るべし。又、中座のー﨟は、二分。中座の端居は、三ひとつ取らせ給うべし。この外、四かうも禄も、座振に分くべし。

一、若宮の御祭、薪の公事用途の事。薪は四百文。両御堂を闕きたらば、一瓶たるべし。御社へはづれたらば、なにも当つべからず。中座の座衆は二百文。ただし、現病は宥すべし。忌の人も同じかるべし。

1. 若宮会の事。馬場を渡らずば、百文の過怠なり。鞨鼓打は五十文たすべし。

一、多武峰の役の事。国中は申に及ばず、伊賀・伊勢・山城・近江・和泉・河内・紀の国・津の国、このうちにありながら上らずば、長く座を逐うべし。この外の国国にあらば、宥すべし。

一、座に居る事。薪はその間。奈良の御祭、多武峰は、前後四日の間。年兄は、遅くとも先に着くべし。同じ年は鬮に取るべし。この外は、先が先にてあるべし。

一、座の入銭。とかく、千、長殿取らせ給うべし。中座の入銭、とかく、千、長殿と、中座のー﨟と、分けて取らせ給うべし。

一、親上らずば、子は当るべからず。又、年の事、親上りたりとも、十にならば当るべからず。

一、寄合の酒は、むらさ殿役たるべし。奈良の御祭の見参酒は、同じく長殿の役たるべし。

　以上。

あの定に、識事の受け取り渡しの年期、座に入料足など、詳しくなし。よくよく尋ねて記すべき者也

右、三十一ケ条、よも聞き違へたることあらじと存ども、もし聞き違へることもやあるべき。心中ばかりの、なをざりならざりし所を見すべきばかりに、これを記す。御一見の後、火に焼きて給うべき者也。

　　たらちねの道の契りや七十路の老まで身をも移すなりけん

　　ははそ原かけ置く露のあはれにもなを残る世のかげぞ断ち憂き

　　　　棄恩入無為、真実報恩者

　　たち返り法の御親の守りとも引くべき道ぞせきな留めそ

　　　　永享二年十一月十一日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　為残志、秦元能書之

一、獅子舞は、河内の榎並に、徳寿とてあり。神変獅子也。増阿、児にて、鹿苑院の御前にて舞いし、面白かりし也。

一、声の薬には、正気散を用ゐられき。味噌気・油気、ことに嫌はる。当場にては、ただ沸り湯を飲みて、咽を焼くがよきとて、いづれも用られし也。幕屋にては、重湯殊勝のもの也。

これは近き比書付也

南都雨悦の能のこと。永正十一年戌の年、十月廿八日の能、脇は鬮なり。この時の脇、外山に取られて、脇をやらる。金剛方二番目、観世方三番目、金春方四番目なり。脇矢立賀茂、二番元服曾我、三姨捨、金春新作、四敦盛、宝隅田川、宰府、昭君、山姥、幽霊熊坂、葛城、藤戸、車僧、松虫、相生、杜若、猿沢、盛久。

　以上十七番也。

一、式三番の様、御祭のごとし。代物、一座、三、二千疋づつなり。定の面のごとく、座衆はみけに染まる。非衆それいなり。ちややも、御祭のごとし。造り物も同。増しの日、雨降りて、舞台引かる。

別本聞書

　是より末は、聞書の外題にて別本にあれども、紙数少ければ、同聞書の本の奥、任礼紙、書加候也。

扇落しの手は、定まるまじき也。遣る手にて落したらば、やがて遣る手にて取るべし。折る手にて落したらば、そのまま折る手にてやがて取るべし。

音曲に、文字の内を寄せ、てにはの字を、長くも短くも、所によりて言うべし。

宮は吐く息、商は引く息也。吐く声は地、引く息は天なり。律は天、呂は地なり。さればこそ、律呂と文字をば番う也。しかれども、今現在の人間、地なれば、呂の声にて祝言をば言うべき也。律をば悲しみの声と云べき歟。根本、天が本なれば、律を悦びの声とは申べし。この宮・商、上り下つて、諸体の曲風をなす。これ肝要なり。

観阿は天女をばせず。しかれども、元清には舞ふべき由、遺言せられしによつて、世子、山とに於きて舞ゐ初めらる。

先祖、増何など、悪き所所。一忠、膝窄りけると也。

喜阿は、音曲上手なれ共、不思議に、横に謡い出して、横にても止めし也。清水寺の曲舞に、小歌節あり。「嵐に類う松が枝は、をのれと琴を調べて」、「嵐に類う」までは、せめて、角の声なれば、曲舞節なり。「松が枝」からは、女節也。「行叡は東を指して」、ここも女節也。曲舞節をば謡はざりし者也。文盲の者也。「御心を得ては」とあるを、「御心にをいてはとは、なにぞ」と云て、「心に於ゐては」と疑いし也。「公光と申者也」、喜阿訛らかすを、道阿は嫌と申ける也。「松には風の音羽山」、この「松には風」訛りたる由、喜阿申き。しかれ共、「秋の野風に誘はれて」、この「風」同様也。よき節訛りは面白きなり。昔は、さして文字の声を磨かざりしなり。

増阿も、喜阿が悪き所をば直すよし申。しかれども、増阿、開口に、「長生不老のまつりごとは、この御代に治まり」、「治まり」をば落すなり。さらに祝言にあらず。増阿が音曲に、開口の面白きと云は、ばうをくのかかりある故也。祝言と申音曲は、面白き曲あるべからず。舞に、うらふつたうらふつたとああくる、きたなし。橋がかりにて舞うも、さしてうけず。かかえて以て、「あは舞うよ舞ふよ」と見せたき所也。後に手も詰まる也。

東国下りの曲舞よ、悪き曲舞かと覚る也。同かかり多し。南阿弥陀仏、節の上手なりしかども、あまりに繰る節多くて、時世、女曲舞なりと云ける也。

　又、弓矢の立合、をかしき立合也。「桑の弓、蓬の矢」と謡い出だす。この声、まづ祝言にはづれたり。「様あり、書くなり」と申せど、なまじいに、立合節を嘗めたる者の書きたる也。

平家に、心得ぬ節の付けやうあり。「この馬、主の別れを惜しむと見えて」と云所を三重に繰る。かやうの所をば言葉にて云て、たとへなどを三重に言うはよし。「頃は卯月二十日余りのことなれば」など、三重なる、悪し。かやうのことは、人に詰められては言葉なし。知りたる同志、うなづき合うこと也。

調子に、上無調・下無調と云は、用の声なり、と云云。

世子の位、観阿に劣りたる所有、たれも知らず、と世子申されしを、尋ねければ、「われは足利きたるによつて、劣りたる也」と云云。